

能界展望 2020年（令和2年）

山中，玲子

（出版者 / Publisher）

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
法政大学能楽研究所

（雑誌名 / Journal or Publication Title）

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

（巻 / Volume）

47

（開始ページ / Start Page）

247

（終了ページ / End Page）

256

（発行年 / Year）

2023-03-25

能 界 展 望 二〇二〇年（令和二年）

山 中 玲 子

はじめに

二〇二〇年に世界を覆った新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは、能界にも甚大な影響を与えた。その具体的な様態や、能楽界あるいは能楽師個人の対応に関しては、既に本年度開催の特別展示図録『危機と能楽―いかに受け止

め乗り越えてきたか』およびその増補改訂版である能楽研究叢書8『危機と能楽』収載の「コロナ禍と能楽」にまとめたので、詳細はそちらを参照願いたい。なお、より広く演劇界全体が蒙った打撃については、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館刊行の『ロスト・イン・パンデミック 失われた演劇と新たな表現の地平』がいち早く、ほぼ同時進行で検証している。また、雑誌『演劇界』の5月号および6・7月合併号にも同館副館長の児玉竜一氏による「二・三月 劇界の動向」「三・五月 劇界の動向」が掲載されている。

以下では、コロナ禍に覆われ振り回された一年を振り返り、能界の主な動きをいくつかの時期に分けて概観した後、逆境下に行われた催しや自粛中に工夫されたオンライン配信など

を取り上げ略述していく。催しの数は例年に比べ圧倒的に少なく、海外公演などもできなかったため、本稿も例年とは異なった構成になることをあらかじめお断りしておく。

新型コロナウイルス感染拡大の影響

1月

月末近い30日に、WHOが新型コロナウイルスに関し緊急事態宣言を発表、日本政府も新型コロナウイルス感染症を「指定感染症」とするなどの動きがあったが、能楽界にはいまだ特別の影響はなく、通常通りの活動を継続。

2月

ダイヤモンド・プリンスエス号の船内感染や北イタリアでの感染拡大などが連日報道された。26日、安倍晋三首相が「全国的なスポーツや文化イベント等について、今後2週間は中止、延期または規模縮小する」ことを要請。27日には、全国の小・中・高校の一斉臨時休業の通知が出された。感染を恐れ観客の出足は明らかに鈍ったが、この時期の能楽界の対応は、会の性格や公演の場所などによって分かれている。宝

生夜能(28日)、横浜能楽堂企画公演『筑摩江』(29日)、国立能楽堂特別公演(同)、若竹能(同、矢来能楽堂)は中止。一方、金春惣右衛門追善能(後掲。宝生能楽堂)は、同じく29日でも開催した。

3月

3月10日、政府が大型イベントの自粛を再要請。23日には東京都が4月12日までの大規模イベント自粛を要請。24日、東京オリンピック・パラリンピックの延期決定。27日、都立庭園内施設の使用中止。都立公園・都管理下の河川敷での花見も禁止された。

緊迫した状況下で、能・狂言の催しも軒並み中止や延期となり、予定通り開催する会の方が特別なケースとなっていく。この時期に決行したのは、観世会(1日、観世能楽堂)、能を知る会 横浜公演(12日、横浜能楽堂)、鍊仙会例会(13日、宝生能楽堂)、喜多流自主公演(22日、喜多能楽堂)、鍊仙会青山能(25日、鍊仙会能舞台)、宝生会別会(29日、宝生能楽堂)など。観世会は、1日の段階で宗家が中止すれば、流儀内の会が「右へ倣え」で中止せざるをえなくなってしまうことを憂慮して敢えて開催したとのこと(観世喜正氏談。能楽研究叢書8『危機と能楽』所収の対談参照)。喜多流自主公演は4月からの年度最後の会であったこと、宝生会別会は番組に(道成寺)があったことなどもあり、とにかくこころまではやろうという決定だったようだ(同書所収「コロナ禍と能楽」参照)。

4月・5月

4月7日、政府が緊急事態宣言を発表。当初は5月7日までの一ヶ月間とされたが、5月3日、東京・大阪・京都・福岡等、複数の都市(能楽堂がある場所はほぼ該当)については5月31日までの延長が決まった(実際は25日に解除)。社会活動全体が休止する中、能界も、公演・講座・稽古・ワークショップ等、基本的に全て中止となる。さらに、素人弟子の強い希望で自宅での稽古を続けたという例や、兄弟や親戚同士で稽古したという例もあったようだが、各能楽堂の事務所も閉まり、舞台に人が集まらない状態が続いた。個別の催しの中止や延期とは別に、令和2年度に予定されていたプログラムをそのまま翌年度に延期した喜多流自主公演のような例もあった。また、国立能楽堂は4月3日付で4月の主催公演の中止を諸方に通知した後、続けて4月10日付で5月の主催公演中止の通知も出している。

能楽協会はこの頃、政府への要望書提出のための資料として、コロナ禍によって能楽師の仕事がどれだけ奪われているかを調査している。協会から「大混乱の中にネット情報を中心に集めた、漏れの多いデータであることに注意された」との条件付きで頂戴した集計表によれば、能楽堂での公演だけでなく、ホールや文化会館などでの公演、ワークショップや講座、カルチャースクール、素人会などについても、中止や延期の情報を集めた結果、コロナ禍が始まって以来6月5日までに、少なくとも703件(中止416、延期287)の仕事が奪われ

たことが明らかになっている(詳細は前掲「コロナ禍と能楽」に掲載の表を参照)。

オンライン上で観客とつながろうとする動きが各所で多く見られたのもこの時期の特徴である。従来も特に若い役者の中にはYouTubeやTwitterなどのSNSを活用して積極的に情報を発信しているケースもあったが、この自粛期間にはICT(Information and Communication Technology)と最も縁が薄いと見られていた能楽界がいっせいにICTに近づきその扱い方を身につけ、活用し始めたと言える。

6月

当初劇場の客席数は上限100席だったが、6月19日より客席の50%の入場が認められるようになった。いわゆる「市松模様」の座席の開始である。観客数の上限が50%になった下旬以降、一般の能楽堂は徐々に再開し、6月20日には宝生流の五雲会(宝生能楽堂)、21日には金春流の櫻詠会(矢来能楽堂)、28日に京都観世会(京都観世会館)が、有観客で開催された。一方、芸術文化振興会は4月24日の段階で、国立劇場・国立能楽堂・国立文楽劇場等の全主催公演を6月末まで中止することを決定。同月に国立能楽堂で予定されていた他の催しも延期となった。

入場できる観客数は少なくとも役者が集まれるようになったこの時期には、無観客のままの上演を撮影して動画配信を行う会、半数の観客の前で上演しつつ動画配信も行うハイブリッド公演なども多くあった。

7月・8月

各流の例会なども順に再開。2月以来延期となっていた催しの振替公演も行われるようになった。観客数の上限が50%であるため、昼夜2回公演で対応した会もあった。

7月27日から8月7日、本来はオリンピック・パラリンピックに併せて行われるはずだった記念の日数能が、「能楽公演2022〈新型コロナウイルス終息祈願〉」(後述)という新しい名のもとに実施された。

9月以降

9月11日、政府は11月末まで劇場の観客入場数を100%に緩和。能楽堂も全席分のチケットを販売できるようになったが、11月になると特に都市部を中心に再び感染者数が急拡大。年明けには第二回目の緊急事態宣言が出されることになる。

能楽公演2020〈新型コロナウイルス終息祈願〉

スポーツと文化の祭典であるオリンピック・パラリンピックの開催に合わせ、日数能を開催することは、早くから決まっていた。主催者である能楽協会はそこに向けて数年前からシンポジウム等を重ねて準備していたが、オリンピック・パラリンピック自体が延期となったため、能楽公演の方は名称を変え、能楽の持つ「祈り」の要素を前面に出しての催しとなった。会場には「医療従事者への敬意と感謝を表明する為、ロビーの一部をブルーにライトアップしています」「一

日も早い終息を願い、能楽界として、祈りを捧げます」との掲示が出され、そのブルーにライトアップされた箇所には「今、困難に立ち向かうすべての人々に天下泰平の祈りを捧げる」との文言を大書した屏風(書家の石飛博光氏の揮毫)も立てられるなど、「祈り」の姿勢があちこちに示されていた。

開催前の数ヶ月は能楽堂での公演が行われていない時期であり、各能楽堂や関連機関等にチラシやポスターを配布するような通常の広報・宣伝活動ができなかったことから、能楽協会の理事たちが動画に出演して直接呼びかけるといった形を取り、その動画も評判となった。また公演日には連日会場入口に理事たちが立ち並んで観客を迎え、コロナ終息を「祈る」だけでなく、能楽界が一丸となってこの危機を乗り越えるのだという気概も感じさせた。

自粛以来久しぶりの大型能楽公演として、入場前の検温と手指消毒、観客が密集しないような工夫、客席やロビーの換気等々、「舞台芸術公演における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン」(緊急事態舞台芸術ネットワークが6月30日に発表)に沿った感染対策を行っており、そのスタイルが、以後の各能楽堂での公演でも踏襲されていったように見える。舞台上でも、切戸を開けたままの上演、地謡の舞台用マスク着用(流儀による)や人数縮小、ワキツレなど舞台上での仕事を終えた演者は退場する等の工夫や、上演時間短縮のための詞章のカットなどが行われた。(安宅)の同山が五人、金剛流の(道成寺)でも上掛り同様に鐘を先に釣るなど、通常

では成されないはずの演出変更も敢行された。しかしこうした舞台上の演出に関わる工夫は、地謡のマスクをのぞき、その後の上演では採用されず、比較的早くに通常の形に戻っていたようだ。

各日の公演と主な出演者は以下の通り。

7月27日 (翁)観世清和・野村萬斎、(末広)大藏彌右衛門、

半能(石橋)古式・金春憲和

7月28日 舞囃子(高砂)八段之舞(武田宗和、(釣針)三宅右

近、(清経)友枝昭世

7月29日 舞囃子(初雪)櫻間金記、(二人大名)茂山千五郎、

(葵上)古式・大槻文藏

7月30日 仕舞(菊慈童)佐伯紀久子、仕舞(巻絹キリ)鶴澤久

舞囃子(松風)豊嶋彌左衛門、(棒縛)野村万蔵、(邯鄲)武田

孝史

7月31日 舞囃子(鷺)野村四郎、(月見座頭)山本東次郎、

(道成寺)古式・金剛龍謹

8月3日 (翁)金春安明・大藏彌太郎、(二人袴)山本泰太郎、

半能(絵馬)女休・香川靖嗣

8月4日 舞囃子(葛城)大和舞(本田光洋、(川上)野村萬、

(安宅)勸進帳・瀧流之伝(観世鏡之丞

8月5日 舞囃子(熊坂)香川靖嗣、(茸)野村萬斎、(西行桜

杖之舞)観世鏡之丞(梅若実の代演)

8月6日 舞囃子(弱法師)大坪喜美雄、仕舞(花筐)狂(梅若

万三郎、仕舞(鵜之段)観世喜之、(木六駄)野村万作、(船

弁慶 白波之伝(金剛永謹(後シテは金剛龍謹に変更))

8月7日 舞囃子(乱)片山九郎右衛門、仕舞(鶴亀 クセ)高橋章、(棒縛)大藏基誠・善竹大二郎、(道成寺)宝生和英

その他の催し

◎大槻能楽堂再開場『日賀寿能』

二〇一九年七月からの改修工事(第一期)を終えてのリニューアル公演。未だコロナの影響を受けていない時期の催し。

1月3日。第一日。(翁 烏帽子祝言)観世清和・観世三郎太・茂山逸平・大倉源次郎・吉阪一郎・大倉伶士郎、(猩々前後之替)観世鍔之丞・観世淳夫・福王和幸

1月4日。第二日。(翁 大黒風流 大槻文蔵・大槻裕一・野村裕基・野村萬斎・野村万作・成田達志・古田知英・成田奏、(鞍馬天狗 白頭素翔)野村四郎

◎桐星会

2月29日。宝生能楽堂。「二十四世金春惣右衛門國直襲名披露」「二十二世金春惣右衛門國長・二十三世金春惣右衛門國和七回忌追善」の催し。(朝長 懺法・大崩ノ語)宝生和英・宝生欣哉・山本東次郎・一噌隆之・幸正昭・亀井広忠・金春惣右衛門。他に、囃子、一調等。会の趣旨からしても中止や延期がしにくかったのだろう、他の催しが多く中止になる中で敢行された。

◎新作能(白雪姫)

八世野村万蔵(五世野村万之丞)十七回忌追善特別公演。6

月18日、観世能楽堂にて収録。8月14日より配信。6月6日に観世能楽堂で上演の予定だったが、コロナ禍のため、無観客の動画配信に変更された。野村太一郎演出・主演。99年3月に五世万之丞主宰の「新生の会」最終公演で上演した作品を新演出で上演した。初演では能の様式を取り入れながらも立ち役は狂言方が演じたが、今回は、シテ方が三名加わっている。出演は、野村太一郎(女王・魔女)、坂口貴信(白雪姫)、観世三郎太(王子)、大槻裕一(鏡の精)、野村裕基(太郎冠者)他。野村萬斎監修。

◎国立能楽堂ショーケース

日本博参画プロジェクトの一つ。文化庁のHPに「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の機運醸成や訪日外国人観光客の拡大等も見据えつつ、日本の美を体現する我が国の文化芸術の振興を図り、その多様かつ普遍的な魅力を発信するため、日本全国を舞台に「日本博」を展開します」とあるように、本来はオリンピック・パラリンピックの開催を意識してのもの。ショーケース公演も、初めての観客や訪日外国人にも親しめるよう、演者によるわかりやすい解説、多言語によるパンフレット、日本語・英語・中国語・韓国語・スペイン語・フランス語の字幕解説などが準備された。各流、各家で二日ずつ、同じ演目を違う役者が演じた。／の前に一日目の演者、後に二日目の演者を記す。7月20日・21日・(萩大名)野村晶人／野村万蔵、(猩々)辻井

八郎／山中一馬。解説…中村昌弘。

7月23日・24日…〈棒縛〉大藏基誠／善竹大二郎、〈土蜘蛛〉山崎正道／小田切康陽。解説…川口晃平。

7月25日・26日…〈附子〉山本泰太郎／山本則重、〈羽衣〉辰巳満次郎／佐野登。解説…和久莊太郎。

8月26日・27日…〈盆山〉野口隆行／奥津健太郎、〈清経〉友枝雄人／長島茂。解説…佐々木多門。

9月2日・3日…〈仏師〉高野和憲／野村太一郎、〈安達原〉観世喜正／中所宜夫。解説…佐久間二郎。

◎国立能楽堂9月公演「手話狂言」

9月5日。国立能楽堂。令和2年度日本博主催・共催型プロジェクト。文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会主催。曲目は〈佐渡狐〉〈清水〉〈六地藏〉。出演…日本ろう者劇団。声の出演…三宅狂言会。演出・指導…三宅右近・三宅矩・三宅近成。

◎新作能〈アマビエ〉

大倉流小鼓方の上田敦史が五月の自粛期間に書き上げた新作能。装束や面を様々に工夫しながら各地で上演。期間限定で動画配信も行った。現在も大槻能楽堂での無観客上演の動画はYouTubeで視聴可能。

9月4日…西宮能楽堂。梅若基徳・江崎欽次朗。

9月22日…泉佐野市りんくう公園。武富康之・有松遼一。

10月5日…姫路市大塩シーサイドパーク。上野朝義・有松遼一。

10月13日…田辺市扇ヶ浜カッパーク。上野朝義・有松遼一。
10月18日…篠山市春日神社能楽殿。武富康之・江崎欽次朗。
10月22日…丹波市いそ部神社拝殿。武富康之・有松遼一。
12月4日…大槻能楽堂。武富康之・有松遼一。無観客での上演動画をYouTubeに公開。

12月14日…奈良市音声館。梅若基徳・江崎欽次朗。

◎新作能 深大寺 蕎麦の能「月魄」

11月23日。調布市文化会館たづくりくすのきホール。ライブ配信あり。伝統芸能プロジェクト「調布能楽ociety」が三年に亘って進められ、最終年である本年、新作能を上演。山中遼晶作・主演（蕎麦の花の精）。監修は梅若実・大倉源次郎。他に、半能（石橋）の上演もあり。

新しい試み

◎VR能『攻殻機動隊』

8月22日、23日（計四回公演）。世田谷パブリックシアター。演出・奥秀太郎。脚本・藤崎淳一。映像技術・福地健太郎。VR技術・稲見昌彦。出演・川口晃平、坂口貴信、谷本健吾、大島輝久。SF漫画『攻殻機動隊』の主人公は、生身の身体を持たず脳を直接ネットワークに繋ぐ「草薙素子」という女性。『能楽タイムズ』7月号にインタビュー記事（奥・福地・川口・坂口・谷本の五氏が登場）が掲載されている。

◎能「隅田川」×オペラ「カーリユー・リヴァー」連続上演

『GEN』

10月18日。よこすか芸術劇場。大ホールに能舞台を設置し、

同じ舞台の上で能とオペラを続けて上演。能の演出は観世喜正、オペラは弥勒忠史。当日の演出等については小田幸子

「大いなる川―能『隅田川』とオペラ『カーリユー・リヴァー』連続上演」(能楽タイムズ令和2年12月号)に詳しい。

隅田川・観世喜正、森常好、竹市学、飯田清一、亀井広忠、オペラ・指揮・鈴木優人。鈴木准、与那城敬、坂下忠広、加藤宏隆。

◎「観世清和×コシノジュンコ 能＋ファッション 継承される伝統と現代の融合」

11月9日。観世能楽堂。令和2年日本博イノベーション型プロジェクト。主催・株式会社インプレザリオ。実見していないため、以下、JUNKO KOSHINOのウェブサイト(junkokoshino.com)より抄出し引用する。「第一部は：コシノジュンコによる日本の美意識を表現したファッションショー」。プロジェクトマッピングを用い「能の所作を彷彿とさせるモデルの静かな摺り足によるウォーキングが、お雛子の音に合わせて独特な世界観を演出。ショーの最後には観世三郎太氏が特別出演。力強い舞と共に蜘蛛の糸が放たれた」とある。第二部では、コシノジュンコがデザインした装束(後シテ)や作り物を使った(紅葉狩 鬼揃)を観世清和他在が披露。「シテの鬼装束の生地は京都の細尾で織り上げた特別な生地を使用し、鬼の畏れを重厚な世界観で表現した」と説明されている。右に掲げたウェブサイトには写真も掲載され

ている。

【自粛中のオンライン活動・動画配信など】

コロナ禍に対応し、いち早くオンラインによって観客と繋がったのは、茂山千五郎家によるYouTube配信「YouTubeで逢いましょう」である。第一回は3月1日配信という素早さで始まり、この展望を書いている二〇二三年一月に70回に達している。

一方、緊急事態宣言発令中で能楽師が能楽堂にも集まれないというきわめて特殊な状況下での限定的な試みも多くあった。一例を挙げれば、京都観世会の「きょうの能楽師」(5月1日〜6月26日)は、老若男女の構成員が、毎日(高砂)賀茂の素謡を少しずつ謡ったり仕舞を演じたりして繋いでいく企画で、京都観世会館再開(6月27日)の前日まで続いた。また、武田尚浩と二人の子息祥照・崇史が主催した連続12時間の生配信「お能のがっこう」(5月4日)は、能舞台も装束・面も所有する家でICTにも明るい若い役者が中心となり、まさに「秘術つと尽くし」た配信で、好評を博したが、能楽師の仕事が通常の状態に戻った今、もう一度同じことをするのは難しいのではないかと思われる。

自粛期間には、個人や家単位の発信だけでなく、国立能楽堂や横浜能楽堂をはじめ各地の能楽堂でも、過去の上演動画の無料配信のほか、本来は観客を入れて演ずる筈だった能を無観客のまま上演・撮影して配信するなどの工夫をしていた。

また、上限50%で観客を入れられるようになってからは、有観客での上演と、有料のライブ配信または期間限定配信を併せて行うケースが多くあった。

なお、こうした多様な活動については「コロナ禍と能楽」でも紹介しており、また『武蔵野大学能楽資料センター紀要』32号には、同センターが2020年に主催したオンラインシンポジウム「コロナ禍とオンライン―能楽師たちの挑戦」の記録が掲載されている。

我々は能や狂言の授業の場で「ビデオでは本当のところは判らない。生の舞台にぜひ触れてほしい」と教え続けてきた。実演者たちも「舞台は生で観てこそ」と言っていたし、もちろん心からそう信じていたと思うが、生の舞台を奪われた結果、従来とは比べものにならないほど良質のコンテンツが、ネット上に数多く上がることになった。繰り返しになるが、能楽界全体から一気にICTへの抵抗が消えたのは、コロナ禍が残した数少ないメリットかもしれない。だがその一方で、能や狂言の配信には能楽堂での通常の公演に取って替われるほどの経営上の力はないことも明らかになった。能楽堂のチケットよりはずっと安い金額でも、その料金を払って動画を見る人の数は、けっして多くはなかったようだ。観客の入場数に制限が無くなって以降は、ただ動画を撮るのではなく、能楽堂の座席で見るとは違う見方ができるような工夫や、特に動画を見ることに慣れている観客層をターゲットにした催しなど、試行錯誤が続いている。

襲名・その他

◎太鼓方金春流の金春國直は、3月に二十四世惣右衛門を襲名した。

◎狂言方と泉流の小笠原匡(ただし)は、11月に由祠(ただし)と改名した。

荣誉・受賞

◎京都市芸術振興賞

1月15日。高林白牛口二(本名≡皓二)(シテ方喜多流)。

◎京都市芸術新人賞

1月15日。宇高竜成(シテ方金剛流)。

◎第38回京都府文化賞功労賞

2月6日。廣田幸稔(シテ方金剛流)。

◎芸術選奨文部科学大臣賞

3月4日。茂山七五三(狂言方大蔵流)。

◎春の褒章 旭日双光章

4月29日。栗谷能夫(シテ方喜多流)。

◎第37回ジャパン・ソサエティー賞

6月18日。野村万作(狂言方と泉流)。

◎伝統文化ボーラ賞優秀賞

8月18日。山階弥右衛門(シテ方観世流)。

◎文化功労者

11月3日。福王茂十郎(本名≡輝幸)(ワキ方福王流)。

◎秋の褒章 旭日中綬章

11月3日。友枝昭世(シテ方喜多流)。

◎文化庁長官表彰

12月1日。中谷明(笛方森田流)。

◎催花賞

12月7日。一噌庸二(笛方一噌流)。

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【追加認定】

7月17日、重要無形文化財「能楽」総合認定保持者の追加認定の答申があり、新たに51名が追加認定された。内訳はシテ方観世流22、金春流4、宝生流7、金剛流1、ワキ方高安流2、福王流1、笛方森田流1、藤田流1、小鼓方幸流1、太鼓方観世流1、金春流1、狂言方大藏流3、和泉流6。

【役員構成】

《会長》野村四郎

《副会長・常務理事》金剛永謹

《常務理事》観世清和・亀井保雄・豊嶋三千春・粟谷能夫・高

安勝久・山本東次郎

《理事》梅若玄祥・浅見真州・金春安明・高橋忍・武田孝史・

宝生欣哉・観世新九郎・亀井実・山本哲也・小寺佐七・野村

萬斎・茂山七五三・宝生和英・飯富雅介・杉市和

《監事》小林与志郎・櫻間金記

【会員数】531名(休会者等をのぞく実質人数)

◎能楽協会

【役員構成】(二〇二〇年八月選任役員)

《理事長》観世鏡之丞

《専務理事》本田光洋

《常務理事》武田宗和・香川靖嗣・國川純・観世喜正

《理事》井上裕久・大倉源次郎・大藏彌太郎・小倉伸二郎・金

井雄資・金子敬一郎・桜井均・種田道一・辻井八郎・中村邦

生・成田達志・野村又三郎・廣田幸稔・藤波重彦・宝生欣

哉・水上優・山井綱雄・山本章弘

《監事》中村元彦・丸岡圭一・大和滋

《顧問》野村萬・観世清和・金剛永謹

【会員数】1095名(二〇二〇年十一月十六日現在)

シテ 観世358 金春97 宝生151 金剛63 喜多47 小計716名

ワキ 高安12 福王15 宝生22 小計49名

笛 一噌11 森田42 藤田4 小計57名

小鼓 幸28 幸清8 大倉17 観世4 小計57名

大鼓 葛野9 高安11 大倉10 石井10 観世2 小計42名

太鼓 観世15 金春18 小計33名

狂言 大蔵75 和泉66 小計141名

支部別 東京537名 名古屋87名 北陸69名 京都141名 大

阪135名 神戸40名 九州69名 本部扱17名

物故者

菅啓好

小鼓方幸流。1月10日に逝去。享年77。

●岩田アキラ

能楽写真家。2月5日に逝去。享年71。昭和23年生まれ。松竹写真部を経て、能狂言、歌舞伎、文楽などの撮影を手がける。国立能楽堂主催公演の撮影を、長く担当した。著書に『能のふるさと散歩 上・下』『野村萬斎写真集』『雀右衛門写真集…すずめ百まで』など多数。

●宇高通成

シテ方金剛流。重要無形文化財保持者(総合認定)。3月28日、悪性リンパ腫のため逝去。享年72。昭和22年生まれ。二世金剛巖に師事。昭和45年に独立。昭和60年、国際能楽研究会を設立。国外での継続的な能の稽古や外国籍の能楽師育成等の功績により第29回催花賞受賞。(卒塔婆小町)〔木賊〕〔鸚鵡小町〕等を披露。「宇高青蘭能之会」「能を楽しむ会」「三輪清浄」「宇高通成面乃会」等を主宰。能面作家としても国内外で活躍した。

●長山禮三郎

シテ方観世流。重要無形文化財保持者(総合認定)。4月5日、間質性肺炎のため逝去。享年77。昭和18年生まれ。小學校卒業後すぐに二世観世喜之に内弟子入門。昭和42年に独立。三世観世喜之、八世観世鍔之丞にも師事。東西で活動を続け、

長年にわたり「堺市民能」「芹屋能」を企画・上演した。(卒塔婆小町)〔鸚鵡小町〕〔嬢捨〕などを披露。堺市有功賞、大阪府知事賞など、受章多数。観世九阜会理事。

●善竹富太郎

本名茂山富太郎。狂言方大藏流。4月30日、新型コロナウイルスに伴う敗血症のため逝去。享年40。昭和54年生まれ。善竹十郎の長男。人間国宝だった善竹彌五郎の曾孫にあたる。5歳で〔靱猿〕の小猿役で初舞台。20歳で〔三番三〕、22歳で〔那須〕、24歳で〔釣狐〕を披く。多くの舞台を勤めるかたわら、桐朋学園短期大学演劇科、昭和音楽大学短期大学部ミュージカル学科、カルチャーセンター等の講師として指導も多く行った。また、全国の学校狂言やワークシヨップ、YouTubeなどを通しての普及活動や、狂言と西洋音楽、オペラ等とのコラボなどにも熱心に取り組んでいた。

●宮内美樹

観世流シテ方。11月20日、癌のため逝去。享年49。初めて鑑賞した能に感動し、旧科学技術庁官僚から転身。観世流橋岡会門下の荒木亮に師事した。千葉県松戸市や都内で能楽講座を開くなど、老若男女に能楽の魅力の普及にも努めていた。2012年に能楽協会に入会。